

演題 7. 成人永久歯の咬耗に関する研究—中国人と日本人との比較—

○曹 越輝\*, 野坂久美子, 佐藤 輝子  
駿河由利子, 甘利 英一, 夏 善福\*  
庄 欣宇\*, 張 春鳳\*

岩手医科大学小児歯科  
北京医科大学第二臨床医学院口腔科\*

咬耗の発生する最大原因は、咀嚼咬合であり、それは年齢や食生活習慣、咀嚼力など、種々の要因で異なるとされている。そこで今回は、人種間の異なる成人中国人と日本人の永久臼歯で咬耗の比較検討を行った。

研究対象は、20歳から29歳までの、中国人と日本人成人110名であり、用いた資料は、上下顎の永久歯列石膏模型である。

研究方法は、各歯種を分割し、各々の歯の咬合面が水平面に対して平行に接触するよう再配列した後、咬耗部位を描記し、それを2倍の陽画に作成した。その上で、画像解析装置IBAS 2000を用いて咬耗面積ならびに咬耗面積指数を求めた。また、同時に、それぞれの歯種の咬耗形態を、栃原の分類を参考にして分類し、それぞれの形態の出現状況を調査した。

結果：咬耗形態について、上顎において、小臼歯では、頬舌側咬頭内斜面のA型がどの対象群でも最も多く、なかでも、第一小臼歯では、中国男子は、85.2%を占めていた。大臼歯、とくに第一大臼歯では、中国人男女は4咬頭内斜面のA型が圧倒的に多く、80-90%を占め、中日間の差は、小臼歯群よりも著しかった。

下顎について、小臼歯では、日本女子を除いて、頬側咬頭内斜面のB型が、どの対象群でも最も多かった。一方、大臼歯では、A型が中国男子で、圧倒的に多く、62.5%を占めていた。

咬耗面積ならびに咬耗面積指数は同じような傾向を示し、上下顎、中日ともに、最も大きいのは第一大臼歯であった。また、男女間には、中日ともに差はみられなかった。しかし、中日間の比較では、第一小臼歯を除いては、上下顎ともに中国の方が日本よりも大きな値を示し、約1.7倍であった。これらの結果から、中国人成人は日本人成人よりも、後方歯、すなわち、大臼歯ほど、咬耗を受けている咬頭数が多く、しかも咬耗面積ならびに咬耗面積指数も著しく大きく、両国間には、明らかに、民族的な差異が示唆された。